

(2) ボランティア活動等体験報告

教職実践センターでは、学生たちに教育現場でのボランティア活動を積極的に促しています。活動を通して、教育の意義や「教師」という仕事を考えるきっかけにしようという目的があります。今年度は、宇都宮市教育センターとの共同事業「宇都宮市別室登校支援学生ボランティア活動」、清原中学校での放課後学習ボランティア、清原の杜地域体験キャンプでのボランティアに参加した学生たちの感想を報告します。

別室登校支援学生ボランティアを通して

河村洋助（人間文化学部）

私はこのボランティアで、教師による支援の考え方の一つを知ることができました。それは、子どもが自身と向き合うための促しを行うことです。

私が活動したのは、A 中学校でした。近辺の中学校に比べて全校生徒の多さに比例して不登校の生徒が多く、別室登校の生徒が過ごす教室には常に4，5人はいるという状況でした。そこでは、生徒どうしで仲良くなり、支援教室での学習の取り組みがおおそかになったり、学級復帰に向けて考える機会が少なくなったりしていました。また、生徒の話を聞くと、自分がなぜ学級に戻りたくないのかわからないというようなことを言っていました。通常学級とは違うゆとりのある生活から問題と向き合うことができなかつたり、そもそも問題を認識できていなかったりしていたのです。

その教室には専属の先生が一人いました。教員という枠組みではありませんが、支援員として生徒と過ごしていたその先生は、些細なことでも生徒に理由を聞いていました。具体的な意見を持たせるためです。また、生徒が「わからない」とか「なんとなく」というときも、いくつかの選択肢を示していました。是非を問う質問だけでは、自分の力で気持ちを表現することができなくなるからです。つまり、なされるがまま、自己決定をできなくなってしまうからです。このように、考える力を生活の中で育てることで大きな課題に取り組ませようと、その先生はしていました。

これは、文部科学省が提唱している生きる力に直結するものです。義務教育によって養うべき能力が、別室登校や不登校の子どもにはいま求められています。家庭環境や成績の善し悪しなど、客観的にみるとさまざまな問題を抱えている子どもにそれを要求することは難しいのかもしれませんが、しかし、教師は答えを急かすのではなく、考えることができるように支援していかなければいけないのです。

正直、私は子どもから早く反応がほしいと思ってしまいます。そこをぐっところえて子どもに考えさせる時間をとること、それを認めてあげることが必要であることを、今回の活動から学ぶことができました。今後、子どもと関わる上で意識していきたいと思います。

清原の杜地域体験キャンプボランティアに参加して

河原 椿（人間文化学部）

私は、8月19日、20日の二日間にかけて行われた、清原の杜地域体験キャンプボランティアに参加しました。このキャンプは、清原地区の4小学校の4、5、6年生約60名の児童が参加し、様々なことにチャレンジし、仲間と助け合うことなども目標としているキャンプです。

ボランティアとしての最初の活動は、事前の指導から始まりました。協力してくださる団体の方々から、当日の大まかなタイムスケジュールや注意事項の確認、カレーライスを作る活動が組み込まれているので、カレーライス作りを練習しました。また、その日に自分の担当する役割も教えられ、私は総務班として活動することになりました。

そして、当日になり、私はキャンプに参加する小学生の荷物を受け取り、管理する仕事がありました。初めて会った小学生達は緊張しているせいか、話しかけるとこわばった笑顔を見せたり、おどおどしい口調で話していたので、可愛いなと思いつつ、二日間楽しんでもらえるかなと少し不安な気持ちにもなりました。そして、開会式をし、アイスブレイクという時間になりました。アイスブレイクとは、初めて会って緊張しているので、ゲームなどを通じて、お互いの緊張をほぐす活動です。私は、総務班だったので担当するチームはなかったのですが、子どもたちが混ぜてくれて、一緒に楽しくアイスブレイクの時間を過ごすことが出来ました。昼食を済ませ、各チームで午後はカレーライス作りに必要な材料を取りに行くことなどをし、夕ご飯のカレーライス作りの時間になりました。スムーズに作られている中、急な大雨と雷に見舞われ、完成されないまま、体育館に撤収することになりました。カレーライスはボランティアの方々に作ってもらい、完成させることは出来ませんでした。大雨の中、みんなで移動した時間はとても楽しくて、忘れられない思い出です。できないと思っていたキャンプファイヤーは雨が止んだので、実行され、火を囲んで歌を歌ったり、走ったりし、たくさんの笑顔を見ることが出来ました。夜は体育館で寝ました。なかなか、寝付かないかなと思っていた小学生達は疲れていたせいか、すぐに寝ていました。

二日目になり、朝ご飯を取る時間で、緊張もなくなったせいか、ご飯をたべながら子どもたちからたくさん話しかけてくれるようになりました。そして、遊びの名人からいろいろな遊びを教えてもらうという時間になりました。竹馬に挑戦することが出来たのですが、子供たちは苦戦しながらも、何回も挑戦し、乗れるようになった時の笑顔がとても輝いていました。最後に閉会式をし、同じチームの子どもたちを見送って、このキャンプは終わりました。

二日間の活動を通して、私は一つの大きなことを成功させるにはたくさんの小さな協力、つまりボランティアの力が必要なのだとわかりました。ボランティア活動は決して楽ではありません。ですが、子どもたちの笑顔見たとき、本当にボランティアに参加して良かったなと思いました。また、次回参加することできるならば、参加したいです。そして、よ

り多くの学生にこのボランティア活動に参加してほしいと思います。

清原中学校放課後学習ボランティアについて

若竹 彩香(人間文化学部)

私はインターンシップの授業で清原中学校放課後ボランティアに参加しました。放課後の限られた時間の中で生徒たちが高校受験の勉強を一生懸命にしていました。生徒たちはそれぞれ自分のやるべきことがわかっており、私は勉強の邪魔をしてはいけないと思い、研究授業のようにみてまわることができませんでした。そのため、生徒たちが勉強しているのを見ていることしかできませんでした。自分から生徒たちに関わっていくのは簡単ですが、私の行為が生徒にとっていい影響を与えるのかと思うとなかなか話しかけることができませんでした。今回生徒たちを観察していく中で少しの物音でも反応してしまう生徒や廊下での話し声に過剰に反応している生徒もいたので、勉強するにあたっての環境作りが大切なんだと改めて思いました。放課後ということもあり集中力が切れてしまっている生徒がちらほら見受けられたので、こういった生徒には「外に一回出てみたら？」などの声掛けや教えあっている生徒には「他の子の邪魔にならないような音量にしよう」など言ってあげるだけでも出来ればよかったです。また、一度リフレッシュするためにストレッチして生徒たちのやる気を引き出してあげられれば、集中力のスイッチが入ったかなと後悔しています。清原中学校には計 3 回行きましたが質問してくれた生徒はいませんでした。もう少し話しかけやすく、質問しやすい環境を作れる教師にならなくてはならないと思い知らされました。

今回この活動に参加してみて、受験に向かって頑張っている生徒たちの姿をたくさん見ることができました。その姿を見て私も頑張らなくてはと発破をかけられました。今回生徒たちにしてあげられなかったことを、4 年次に行く教育実習ではしっかりとやって、今回の反省を生かし生徒たちに来てくれてよかったと思ってもらえる存在になりたいです。自分自身にとっても実りある実習にし、将来に少しでも活かしたいです。